

〔論 文〕

## 『聖ジュリアン伝』の二つの狩猟

大 橋 絵 理

Eri Ohashi

### はじめに

様々な困難を乗り越え、大罪を犯した人間から聖人へと変貌するジュリアンの伝説は、周知の事実として、フローベールの『聖ジュリアン伝』<sup>1)</sup>の中でもそのままなぞられている。実際、フローベールがどのような書物の聖人伝説を参考として『聖ジュリアン伝』を書きあげたのかという研究もすでになされている<sup>2)</sup>。その中で、ジュリアンの劇的な変貌にとって不可欠なのが、聖人となるための過程には一見不必要に見える狩猟なのである。しかも、ジュリアンは狩猟で殺した鹿の呪いを避けるため、狩猟を繰り返さないことを決意し両親の城から出て別の人生を歩むにもかかわらず、やはり再度狩猟を始めてしまう。筋書きの一連の流れは伝説と同様だとしても、狩猟の際の詳細な動物達の描写、およびジュリアンの微妙な感情の揺れ動きは、フローベールの純粋な創作となっている。

本稿では、カルネや草稿をとおして第一の狩猟と第二の狩猟を分析し、フローベールが狩猟に与えた意味、ひいてはそれがジュリアンの聖人への変貌においてどのような重要性を持っているのかを検討することによって、彼の創作の特異性を解明していきたい。

### I

前述したように、ジュリアンの狩猟には二段階ある。最初の狩猟は両親の城でのいわば子供時代の行為であり、二回目の狩猟は、両親の城をでて妻を娶り新しい自分の城を構えた後になされた青年時代の行為である。この相違点に留意しつつ、まず第一番目の狩猟について検討してみよう。

フローベールは、草稿を執筆する以前に、必要だと思われる資料をカルネに抜粋してメモしている。『聖ジュリアン伝』のカルネは「カルネ17」として分類されており<sup>3)</sup>、全部で33のフォリオのすべては狩猟にかんする読書ノートとなっている。この事実からもいかにフローベールが狩猟に最初から関心を抱いていたかがうかがえる。とくに彼の興味をひいたのは「鷹狩り」であった。それでは、「鷹狩り」とは『聖ジュリアン伝』のなかでどのような意味を持つにいたるのだろうか。

「鷹狩り」のフォリオは89V°, 90V°, 80V°から72V°の15を数え、全体数のほぼ半分を占めている。まず、カルネを見てみると鷹の色彩についての記述が目を引く。«faucon hagard [bec] <yeux> et

pattes jaunes, bec bleu, ailes brunes, corps blanc tacheté de brun»<sup>4)</sup>。鷹は「黄色」「青」「茶」「白」というように非常に鮮やかな色彩を持っているのだ。だが、それはカルネからさらに進んだ草稿の段階に入ると微妙に変化していく。鷹の記述は草稿では、「Faucons pèlerins」や「Le gerfaut d'Allegmagne」というように個別にその特徴があげられるようになる。とくにここで注目すべきは「Faucons pèlerins」についての記述であろう。

Faucons pèlerins † c'est-à-dire pris sur les falaises en de lointains pays α qui ont ‖ passé par dessus la g<sup>de</sup> mer. M La cuisse † des mâles noire. les ongles α pointus, les sourcils ‖ ht<sup>s</sup>. les yeux g<sup>ds</sup>, plumes blanches † neige colorées de vermeil ongles.<sup>5)</sup> [f.84(419v)]

カルネでメモされていた色鮮やかな「faucon haggard」は「読書ノート」の段階で消去され、「草稿」でも見られることはない。ただし、鷹の種類は異なっている、色彩に重要性が置かれていることにはかわりはない。ただ、色調には変化が見られ、「Faucons pèlerins」の色彩は「黒」「白」「朱色」に限定されてしまう。

そして最終稿になると「Faucons pèlerins」は、ジュリアンの父親が用意した鷹の一種類として登場するだけで、その色彩についての記述は一切消去されている。しかし、「黒」「白」「朱色」の三色だけは、頻繁に印象的に使用されることになるのだ。それは特にジュリアンが殺戮し、彼の宿命を決定づける鹿の親子の描写に見られる。牡鹿は「Le cerf était noir [...] avec une barbe blanche»[TC203]と黒と白で表現されている。また朱色は、鹿を殺した時の空の色、「le ciel était rouge comme une nappe de sang» [TC203]の赤と通じる。さらに、この色彩はジュリアンが自分の両親を殺害した場面とも重なりあうのである。まず、その悲劇が起こった部屋の奥の両親が眠る寝台は「闇」に沈んでおり、まさにこの闇があったからこそジュリアンは両親を妻とその愛人だと間違えて悲劇を起こしてしまうのだ。また、殺害後の部屋の中には「Des éclaboussures et des flaques de sang s'épalaient au milieu de leur peau blanche, sur les draps du lit» [TC214]と、「白い皮膚」の上やシャツにしぶきがかかった血など、べったりついた血が広がっている。それは、奇妙に牡鹿の白い鬚と、その時の空のイメージと一致し、二つの家族の殺害の相違を曖昧にしていると言える。

結局、カルネでの鷹の様々な色彩は、鷹自身の色としては完全に消去されるにしても、次第に独立した色彩として凝縮され、最終稿にいたると重要な象徴性を付加され、鹿の殺害と両親の殺害というそれぞれの狩猟での悲劇の場面に効果的に使われるようになったのである。なぜ鷹がこのような重要性を持つにいたったかを解明するためには、鷹が第一番目の狩猟の特質を示していることに留意すべきであろう。じじつ二度目の狩猟の時、ジュリアンはひとりで出かけ、鷹は全く姿を現わさない。一度目の狩猟の時、彼は他の者達と一緒に「ひとり馬にまたがって、手飼いの鷹を供につれて」 [TC199] 狩りにでることを好んだと記述されている。このことから、鷹とジュリアンの関係に留意する必要がある。

まず、カルネを見るとF°80V°にあるように、「[faucons <ple> pèlerins] pris sur les falaises de la mer en lointains pays, et qui ont passé par dessus la mer grande」<sup>6)</sup>と、鷹たちが海を渡って来たことが強調されている。このカルネの文章はそのまま草稿へと書き写され<sup>7)</sup>、最終稿では次のように書かれている。「le bon seigneur, à force d'argent, s'étant procuré des tiercelets du Caucase [...] et des faucons-pèlerins, capturés sur les falaises au bord des mers froides, en de lointains pays» [TC199].ジュリアンが生まれた国の場所は明確な指定をされていないが、城の庭園の記述のなかに「バジリク」や「ヘリ

## 『聖ジュリアン伝』の二つの狩猟

オトープ]、「葡萄棚」という植物名が見えることから、比較的穏やかな気候の地方に位置すると推測される。そのことから、鷹はたんに狩りの道具として考えられているのではなく、ジュリアンの育った場所以外の国々、つまり異国の存在を示唆していることがわかる。

さらにカルネのF°79では、それに関連して次のように書かれている。

*Le tartaret, plus grand et gros que pèlerin, vient de Barbarie.*

*Gerfaut: Allemagne*

*Sacre: plus grand que le Pèlerin.*

*Lanier: plus court, empiété.<sup>8)</sup>*

ここに見られるのはバルバリ、ドイツ、ユーラシア大陸、アフリカという様々な国から集められた鷹の品種である。一方ジュリアンも両親の城を出てのち、「次々とフランスの王太子やイギリス王、エルサレムの聖堂武士、パルチアの領主、アビシニアの君主、カルカッタの皇帝の急を助けた」[TC232]と様々な国々を巡る。つまり、ジュリアンは鷹が連れてこられた世界の国々を、第一回目の狩猟の後、自分自身で回ることになるのだ。このコントの中で鷹に付与されていたエキゾチスムは、成長したジュリアンが自分で体験することになるエキゾチスムであったと言える<sup>9)</sup>。

また、さらにカルネでの鷹の色彩の多様性を思い起こしてみよう。『三つの物語』のなかで『聖ジュリアン伝』のあとに書かれた『純な心』のフェリシテは、遠い国アメリカから来たオウムに心を奪われる。その中で、「オウムの名はルルといった。背が緑で、翼の端が桃色で、頭は青くて、胸はすっかり黄色だった」[TC181]<sup>10)</sup>と書かれている。まさにこの『純な心』の遠い異国から来たオウムの夢を誘う華やかさは、一見オウムとは共通点もないように思える狩猟に使われる狩猟鷹の色彩と見事に一致しているのだ。オウムのルルは、死後、飼い主のフェリシテから精霊とあがめられる聖なる存在へと変貌し、彼女の死に際しても彼女を天上へと導くのである。それに関連して、鷹狩りの中で重要な位置を占める「Faucons pèlerins」という言葉にも留意する必要がある。なぜなら「Faucons pèlerins」は「ハヤブサ」という意味を持っているが、「pèlerin」にはもちろん「巡礼者」という意味もあるからだ。そしてジュリアンは、両親殺しの後、自分自身が巡礼者となる。要するに、鷹は、残酷な行為と聖なる行為という二つの矛盾した行動を起こすジュリアンの分身なのだ。それゆえに、鷹の色彩はジュリアンが引き起こした鹿の家族と自分の家族の死の場面に投影されることになったと言える。

次に、カルネのなかに見られるもう一つの重要な要素を見てみよう。それは鹿についてのメモであり、記述は6フォリオに及ぶ。カルネにはおもに鹿の生態や狩りの方法がメモされており、F°83V°Cには次のように書かれている。「Le bois du cerf pousse, croît et se compose comme le bois d'un arbre. [...] c'est pour ainsi dire un végétal greffé sur un animal et qui participe de la nature des deux」<sup>11)</sup>。ここでは、鹿の角は木の枝のようであり、「動物に接ぎ木された植物」、「自然の性質をおびている」と書かれているが、それは鹿が自然と融合している動物であることを示唆している。いわば、鹿は自然の一部として、世界に調和をもたらす存在として考えられているのだ。

また、鹿の別の側面にもフローベールは興味をひかれている。カルネの同じフォリオの最後には「Le roi (Louis XV) mange actuellement les dainties et même dans le temps du rat, par régal」とメモされており、鹿は他の森に住む動物達とは異なった存在であったと、フローベールが考えていたことがわかる。当時王は一般の人間より神に近いと考えられていたことから、王に食されることによ

って、鹿は王の身体と同化し、崇高な存在に変貌するのだ。

このような王と鹿との親密な関係は、その後「読書ノート」f.44(497r)にも見られる。

La plus noble était la chasse au cerf. - puis au sanglier. La chasse aux || cerf blanc. la plus rare de toutes  
↑ *aimée du roi Artus. en 1748 le roi de Bavière || en donna le divertissement à toute sa cour. [...]*

Les rois carlovingiens se faisaient enterrer ~~dans~~ couverts || d'une peau de cerf. comme les sauvages avec  
leurs armes, ou || parce qu'il n'était permis qu'aux rois de tuer cet animal. [f.44(497r)]

ここでは鹿狩りは「最も高貴な」狩りであり、とくに王達が好むものであったし、「王にしかこの動物を殺すことは許されていなかった」と述べられている。読書ノート以降には上記の記述は消去されるが、その後も王と鹿は潜在的に同格な関係を維持し続けると考えられる。このことは、予言者の言葉どおり、のちに帝王の身内になるジュリアンと鹿との共通点を暗示しているのである。

しかし、鹿はたんに王としての高貴さ、あるいはジュリアンとの密接な関係を示しているばかりではない。ジュリアンが射止めた鹿は親子であった点に留意しよう。プランでは、鹿を殺したその夜にジュリアンが子鹿をほうふつとさせるような幼子のように、無邪気を漂わせる怯えをもって両親に訴える場面がでてくる。«Rentré chez lui, le soir, près de ses parents || pleure. «- mère on m'a dit que je te tuerais. || ses parents ↑ ~~à~~ ~~le~~ le consolent» [f.50(490r)]. 彼は両親のそばに行くが、狩猟を教えてくれた父親の方へは向かわずに、母親にたいして恐怖感を訴える。そして母親にのみ «te» を殺すと言われたと話しかけるのだ。鹿は「両親」を殺すであろうと呪詛したにもかかわらず、ジュリアンの言葉から完全に父親が抜け落ちていることは興味深い。彼が恐れているのはまさに「母親」を殺すことなのである。

草稿段階に入るとジュリアンは呪いについては口を閉ざし、決して両親に話さず一人で思い悩むだけになり、それは最終稿まで変わることはない。そして、鹿の親子を殺害する場面は草稿では次のように詳細に描かれている。母鹿は子鹿<sup>12)</sup>が目の前で殺されたのを見て次のような反応を示す。

voix ↑ ~~profonde-profonde~~ ~~α~~ ~~lamentable~~ ↓ *déchirante - humaine - X || on voyait très bien ses pleurs.*  
[2 #H]

# ↑ *Julien* [4 #H] || ~~mais le dard~~ ↑ *trait* ↑ ~~la flèche mal dirigé parce qu'il tremblait~~ ~~α~~ ↑ [H] *il put*  
*pourtant* || [H] ↓ *l'atteignit au genou.* ↓ ~~α~~ *Elle boitait sautillant* ↑ *en sautillant sur trios pattes Julien*  
↓ *Julien exaspéré la tue lui lance* [f.110 (429r)]

鹿の母親は人間のような嘆き声をあげただけでなく、ジュリアンの目には「はつきりと涙が見える」のである。動物が人間に似た声をあげることには不思議ではないが、「涙」を鹿が流すという表現は非常に擬人化されていると言わざるをえない。その結果、動揺してジュリアンは震えてうまく矢を放てなくなってしまうのだ。当然その理由は潜在的に母鹿と自分の母親の姿が重なりあったからであると考えられる。そして最悪なことに彼は震えたあまり、ねらいが外れて鹿の膝に矢をあててしまう。第一回目の狩猟をとおして彼がこのように殺し損じたのは、母鹿のみである。彼は他の動物達はもちろん、子鹿や父鹿にも射止めそこないはしない。つまり、この母鹿にたい

する場面で、はじめてジュリアンの狩猟への、とまどいとためらいが現れるのである。

しかし最終稿では、この場面は次のように描かれることとなる。「sa mère, en regardant le ciel, brama d'une voix profonde, déchirante, humaine. Julien, exaspéré, d'un coup en plein poitrail, l'étendit par terre» [TC203]. 母鹿が人間のような嘆き声をあげたのち、ジュリアンは突然猛り立ち一度で鹿をしとめるようになる。ここでは、母鹿の涙とジュリアンの失敗は削除されている。草稿での記述の消去によって、特別な感情移入がなくなり、ジュリアンの鹿の親子への対応はそれぞれに平等となり、冷静さを持って彼らを殺すことになるのである。これは、ジュリアンの殺意への潜在的な拒否感と愛情が、第一回目の狩猟の場面から完全に消滅したことを示している。

結局、自然と融合し、調和している鹿は、また、それが親子として物語に表出する時、動物のみならず人間的な高貴さや情愛も示唆することになる。それゆえに、鹿の殺害は、同時にジュリアンが、最初は鹿の親子のように調和の世界に属していながらも、自分自身でその世界を頑なまでに拒絶、破壊しつつ、自らをそこから追放することを示しているのだ。しかし、削除されてしまったプランでの母親への嘆きの言葉や草稿での母鹿殺害の時のためらいは、同時にジュリアンの未来の贖罪を暗示してもいる。つまり、狩猟の道具としての鷹はジュリアンの行為の二面性を示していたが、狩猟の獲物、犠牲者としての鹿は彼の矛盾した精神面での二面性を象徴していると言えるだろう。

それでは、鷹や鹿という個別の動物をとおしてではなく、ジュリアン自身の狩猟への感覚はどのようなものであったのだろうか。草稿で繰り返し記述されている一つの場面があるが、それはジュリアンがまだ狩猟を始めたばかりの時期の描写である。「les dames des alentours conviées || avec leurs maris, les enfants, les camérières, tout le monde se jetait  $\uparrow$  jetant dessus ||  $\alpha$  les [cailles] empoignait facilement. [ Puis  $\uparrow$  ensuite on déjeunait à l'ombre  $\uparrow$  sous  $\downarrow$  à l'ombre des saules || en un coin du pré]» [f.95(419r)]. この文章からもわかるように狩猟は一般的に女性や子供なども一緒に招かれた高貴で優雅な遊びとしての要素が強いものであった。彼らは道具をいっさい使用せずに、罾によって捕らえられた獲物を手づかみでつかみとり、その後、柳の木の下で昼食さえ楽しむのである。とくに«prè»という言葉は、その光景ののどかなピクニック的な雰囲気強調していると言ってよい。最終稿では、さすがに昼食の場面は消去されているが、皆が手で鶉を捕まえる部分は残されている。このことから、ジュリアンが好んだ狩りの方法がいかに一般的な方法と異なっていたかが明白となるであろう。

じっさい、草稿f.95(419r)でもジュリアンはそのようなピクニック的行為にたいして«Julien se dégoûta promptemt de ~~ces lâches~~  $\uparrow$  commodes artifices - qui sentent || ~~le vilain~~  $\uparrow$  le rustaud»と感じている。ここでは«dégouta», «lâche», «villain», «rustaud」というように、非常に厳しい嫌悪感を意味する言葉が並列されている。それは狩猟の方法にたいしてというよりも、ジュリアンの他者にたいする侮蔑を表現していると考えられる。そして最終稿になると、「Julien méprisa ces commodes artifices; il préférait chasser loin du monde, avec son cheval et son faucon»[TC199]と、それらの感情的言葉はすべて消去され、ジュリアンは単に狩猟の方法にだけ不満を持っているように書き直されている。このように草稿と異なり感情の発露がおさえられた結果、「馬と鷹」だけを連れて人々から離れるジュリアンの孤立性がいつそう強まることになる。つまり、彼は狩猟によって明確に他者とは異なる自己を発見し、それを徹底的に行動に移すようになったのである。

そして、ジュリアンは新たな自分自身へと生まれ変わる。それは、f.99(542v)に突然挿入された文章によって明白になる。



聞こえたという点である。つまり、これは鹿の呪いの言葉によって引き起こされた狩りなのだ。その後、ジュリアンは、窓の下に「動物」の足音を聞くことによって、訳もなくそれまでおさえつけていた狩猟への欲望が沸き起こり、出発して行くことになる。この草稿に特徴的なのは、ジュリアンが出発した直後に彼の両親が到着する事実である。これは、レーマンも指摘しているように<sup>14)</sup>、ジュリアンが聞いた窓の下の動物の足音はじつは彼の両親の足音であったことの暗示だと考えられる。これらのことから、彼は鹿から呼び出され、自分の両親を動物のように狩るために第二の狩猟に出かけたということがわかる。

だが、草稿が進むにつれ、描写は微妙に変化していく。最初に「鹿の鳴き声」が消去され、f.144(469r)では余白に「狐の鳴き声」と書き入れられる。狐は第一の狩りではほとんど重要な役割を担っておらず、「黒ツグミやカケスやイタチや狐やハリネズミや山猫や、数限り無い獣の数が、一足ごとに増えてくる」[TC202]という文章にでてくる程度である。それは、狐は鹿のような特別な動物ではなく、様々な動物の一つにすぎないことを示している。

また、f.146(441v)になると次のように描写が変化する。

Un soir du mois d'août, qu'ils étaient dans leur chambre - elle venait de se coucher, α ~~Julien~~ ↑ il se promenait de long en large avant de dire sa prière, quand il entendit au loin le jappement d'un renard puis des pas légers, le long du mur sous la fenêtre. Il crut même distinguer ~~comme~~ des respirations [ hale-tantes, avec des frôlements de feuilles, des battements d'ailes sur la mousse}α il entrevit dans les masses d'ombre, à des hauteurs inégales ↑ à ras de la / du terre /sol ↑ ~~comme des points brillants qui devaient être des prunelles-~~ ↑ ~~comme~~ des apparences d'animaux. || La tentation était ↑ trop forte.

ここでは、それ以前の草稿と異なり、ジュリアンは妻とともに寝に行こうとしない<sup>15)</sup>。それどころか、夜にもかかわらず、祈りの前に部屋を大きく横切り、あたかも何か出来事が起こるのを待っているかのようなのである。また、蒸し暑さや星という夏の夜の描写も完全に消去されている。この消去により、第一の狩猟との対照性、その寓話性が薄められ、物語はひたすらこれから起こるであろう悲劇へと集約されていく印象を与える。さらに、「鹿の鳴き声」のかわりに、余白ではなく草稿の文章の中に決定的に「狐の鳴き声」が採択されたことによって、そのあとに続く「窓の下の足音」は不特定多数の動物を暗示することになる。それは、ジュリアンが「見たと思った」様々な幻想によって強調される。「葉ずれの音とともに聞こえる息づかい」と「コケの上の羽ばたき」を感じ、生々しい「影の塊」の眼だけが煌めいているかのようにジュリアンには見えるのだ。このことから、上記の草稿では、第二の狩猟への上記の出発の動機は、鹿に呼び出されたからではなく、闇の中に立ち現れてきた影に誘われた結果だと結論づけることが可能となる。

さて、最終稿になると、この場面はもっと単純に描かれるようになる。

Un soir du mois d'août qu'ils étaient dans leur chambre - elle venait de se coucher et il s'agenouillait pour sa prière - quand il entendit le jappement d'un renard, puis des pas légers sous la fenêtre - et il entrevit dans l'ombre comme des apparences d'animaux. La tentation était trop forte. [TC209]

ここで注目すべきは、妻はすでに眠っているが、ジュリアンは祈るためにひざまづいていたという点にある。彼は草稿で見たように部屋を落ち着きなく動き回ることもなく、むしろ祈りによっ

て平静さを保っているように見える。それは、彼があたかもこれから起こす悲劇にたいして神に赦しを願っているかのようなのである。そのような静かな雰囲気の中かで、彼は狐の鳴き声と、窓の下の足音を聞く。ただし草稿とは異なって、動物達の生々しい描写は削除されており、「彼は闇のなかにいくつもの動物の影のようなものが見えた」とだけ書かれている。その動物達はもはや無気味に輝く眼すら持っておらず、草稿の動物達と比較すると、捕らえてもすぐに消えていってしまうはかない幻でしかないように見える。つまり、最終稿では、鹿の呪いの強さや、動物達の恨みが消えて、まるでジュリアンは、彼が祈っている神の意志によって導かれている印象を与えるのである。

それでは次に、以上のような経過を経てジュリアンがおこなった二度目の狩猟の特徴を具体的に見てみよう。f.120 (480r)の余白には、「heureux, content, rajeuni, allégé, délivré」と書かれており、ジュリアンは狩猟に出発して、限り無い喜びを感じたと記されている。この感情は草稿では余白から本文へと移行するにつれ次第に詳細になっていく。「~~il marchait~~ ~~allègrement, se sentait~~ ↑ ~~allait d'un pas léger~~ ↑ ~~heureux comme rajeuni, délivré.~~ ↑ ~~la pente du terrain la douceur de l'air~~ ~~jouissait de la douceur~~ ~~du gazon~~ ↑ ~~de l'herbe, lui faisait plaisir sous les pieds. l'air était doux~~」[f.151(472v)]。上記の文章では、なぜジュリアンが幸福感や開放感を感じたかが説明されている。彼が芝草の柔らかさや大気の甘さを感じるのは、自分が自然の甘美さや生命感と和解して、不吉な呪いから開放されたという幻想を抱くからなのだ。だが、最終稿になると、それまで草稿では繰り返し書かれてきたこの描写が、非常に簡潔になる。「~~il marchait dans la forêt, d'un pas nerveux, jouissant de la mollesse du gazon et de la douceur de l'air~~」[TC211]。草稿では「軽やかな足取り」であったのが、最終稿では芝草や大気の甘さを享受しながらも「神経質な足取り」に変わるのだ。

明らかに幸福感が失われたこのような変化が起こった理由は、草稿を読み進めることによって明白になる。

~~Le temps était clair comme en plein jour~~ ↑ ~~on y voyait comme en plein jour.~~ La lune ↑ ~~Il A~~ ~~qu'il avait en face~~ ↑ ~~l'éblouissait~~ ~~l'éblouissait.~~ [...] Elle faisait ↑ ~~dans~~ ↑ ~~ça à là~~ ↓ ~~ça à là des~~ ↑ ~~longues taches blanches~~ ~~α~~ ~~il hésitait à s'avancer, croyant apercevoir~~ ↑ ~~une des flaques d'eau, qui n'existaient~~ ↑ ~~qui n'existait~~ ~~pas~~ ↑ ~~pas.~~ Il mit les pieds ~~dans des mares~~ ↑ ~~en d'autres endroits~~ ↑ ~~étangs recouvertes de~~ ↑ ~~verdure fine~~ ~~qu'il avait~~ ~~prises p. de l'herbe.~~ - ~~deux ou trois fois il se retourna croyant~~ ~~qu'on l'appelait~~ ↑ ~~chuchottait~~ . [f.151(472v)]

上記の草稿では、場面は夜だが、あたかも月の輝きのせいで「真昼のように思える」と二度も書かれている。ここでは、同じ表現が反復している場合が多い。「月の白い光が水の輝きに見える」という文章のあとにも「存在しない」という言葉が二度書かれ強調されている。これは、やはり反復されている「~~éblouissait~~」という言葉が示すように、ジュリアンが狩猟を行う空間が、幻惑の世界であることを意味している。すべてが騙し絵なのだ。実際、草の緑に覆われていたために、彼は過って沼に足を踏み入れてしまうし、誰かが彼を呼んだ声さえ聞こえたような気がして振り向いてしまう。つまり、視覚的、聴覚的のみならず、ジュリアンの身体すべてが騙し絵に完全に入り込んでしまっただけで抜け出すことができなくなっているのである。第一の狩猟の時と全く季節が逆であったことを考慮に入れると、まさしく第二の狩猟は鏡の世界であると言える。

それは、精神的にもジュリアンに影響を及ぼすようになる。



*pleine du parfum des fleurs* ↓ *avec des* ↑ *de senteurs amollissantes* ↓ *énervantes, une mollesse de cœur, un étourdissement* || dû sans doute aux fleurs. Julien fut obligé de s'asseoir sur une pierre || ↑ *p. haleter un peu* s'essuyer le front. ↑ *Il était décontenancé* ↑ *mortifié, ne savait que faire,* ↑ *Il* regrettant de s'être || s'être mis en ↑ *d'être parti p. la* ↓ *d'avoir voulu chasser* ↑ *si étourdimt* dans des conditions *pareilles* ↓ *pareilles* ↑ *aussi mauvaises conditions.* [f.151(472v)]

彼は森の花の香によって無気力になり目眩をおぼえる。森の香りは彼から立っている気力さえ奪うのである。その結果石の上に座り込んでしまうが、それは彼が森の力に負けたことを象徴している。ジュリアンは森に取り込まれてしまったのだ。じじつ、座りこんだあとは、ぐったりとし何をすればよいかさえわからなくなるというように判断力も喪失してしまうのである。そして呆然と城を出発してしまったこと、狩猟をしたいという欲望を抱いたことも後悔する。

さらに、進んでいくにつれ、彼を取り巻く世界は本性をあらわにしていく。草稿では何度も次のような描写が描かれる。「Il sortit ↑ *donc* de la forêt, *en tâtonnant* - ↑ *ça et* ↑ *se cognant contre les troncs d'arbres* ↑ *en tâtonnant* ↑ *devant lui* ↑ *avec sa lance, se p-s'embarrassant* ↑ *s'empêtrant* dans *lles lianes, se déchirant aux épines*» [f.151(472v)]. 森を出るとジュリアンは木の幹にぶつかり、野バラによって行く手を阻まれ、その棘で引き裂かれてしまう。彼を取り巻く世界は、ジュリアンの気力を奪ったあと、本格的に攻撃にでるのだ。すべてのものがジュリアンの敵となる。彼が無気力なものにもかかわらず、それまである種の陶酔感を与えてきた自然が、突然ジュリアンに苦痛を与えるようになる。そしてもちろん、それは自然だけにとどまらない。

プランf.120(480r)では動物について余白に次のように書かれている。「(2) les bêtes n'avaient pas l'air mechant, mais seulement de le défier de se moquer»<sup>16)</sup>. 動物達は自然のように悪意をむきだしにはしないが、ただ数多く連なって、ジュリアンをからかうそぶりを見せるのだ。色彩という側面からも、第一回目の狩猟の動物とは非常に異なっている。まず、草稿ではジュリアンは最初に野うさぎを見つける。「il aperçut ↑ *où il aperçut* ↓ *y avait* ↓ *avait* ↑ *se tenait* dans un sillon, *trios* || *petites masses noires* qui ne pouvaient être que des lièvres ↓ *au gîte* - Il arriva || *tout auprès* ↑ *d'eux* ↓ *d'eux* et *reconnut* *trios gros cailloux*» [f.151(472v)]. 野うさぎは、結局、石だったのだが、黒い塊としてジュリアンの目に映る。また、次に出現する動物にも注意をはらいたい。「Un ↑ *vieux loup*. - blanc» [f.151(472v)]と、ジュリアンを墓場に導く狼は白色だと書かれている。このように第二回目の狩猟では、第一回目の狩猟とは対照的に極端に動物に使われる色が減少している。色彩は白と黒に集約され、動物達にも生命が感じられない。最終稿では、動物達の色彩はさらに消去されている。狼はもはや色を持たないし、野うさぎは存在自体が消え去っている。唯一猪のみが「真っ黒な影」として描かれているのみである。彼らは最終稿に近づくにしたがって、限りなくその存在を曖昧にしていくのだ。

しかし、変化しているのは動物の表面に見える色彩のみではない。彼らの身体の質も固有の変貌を遂げている。まず、最初にジュリアンが見つけた黒い野うさぎは、近寄ってみると石であったことを思い起こしてみよう。さらにf.152(475r)には「Une fouine glisse dans ↑ *passé entre ses jambes*. - ↑ *veut la couper en deux* ébrèche son sabre *dessus* ↑ *contre un caillou*» という記述が見られる。うさぎばかりか、イタチまで石なのだ。これらのことから、動物達はもはや生物ではないことが理解できる。彼らはジュリアンを苦しめ、傷つけた森や自然の一部なのだ。最終稿では、じつは石で

あった野うさぎやイタチは登場しない。そのかわりに「槍はあたかもその牛が青銅でもあるかのように折れた」[TC212]と、直接的表現ではなく「comme si」という比喩的な表現に変化している。「青銅」という言葉は、「石」よりも人工的なイメージを与える。つまり、最終稿では動物達はジュリアンの誤認というよりも、ある外部の意志によって特異な形で出現してきたのだということが言えるのである。

また草稿では、死が全面に表出する。«les hyènes traînaient ↓ *par terre des lambeaux de lin* ceuls. le taureau portait ~~les éclats de la~~ ↑ [ill] *au flanc le tronçon || de la lance entre ses lèvres* ↑ *sans saigner*, la panthère tenait une flèche à sa gueule» [f.154(476v)]. ジュリアンは自分がかつて殺戮した動物達に囲まれていることに気づくが、その動物達の姿は痛々しい。雄牛は脇腹に槍の断片を刺したままだし、豹は顔に矢が突きたつたままである。そして、彼らはまったく血を流していないのだ。まさにジュリアンは死の世界に迷いこんだと言える。さらに彼の恐怖感を煽るのは、それらがすべて、自分が苦しめて殺害した動物達だという事実である。彼らは瀕死の苦しんだままの姿でジュリアンの眼前に現れる。だが、動物達は森がジュリアンを傷つけたように彼を直接的には傷つけようとはしない。«~~Les animaux n'avaient pas l'air de vouloir lui faire du mal, le regardaient || Il se sentit paralysé. ↑ incapable de rien d'avancer, de reculer, de faire ~~un~~ ↑ le moindre ↑ mouvement ↓ prenant une 6<sup>de</sup> résolution~~» [154(476v)], というように、彼らはじっとジュリアンを見つめるだけである。死者の世界のなかで、ただひとり生者であるジュリアンは、無限の恐怖を感じ、一步も動けなくなってしまう。まさに、ジュリアンは死の世界に取り込まれ、青銅の牛の同様に生きながら死者へと転化してしまったのだと言える。

さて最終稿にいたると、ジュリアンに殺された動物達が、武器を身体につけたままの姿で現れることはない。彼らは「ジュリアンのまわりにぎっしりと輪をつくる」[TC212]というように、最終稿では、草稿よりも死んだ動物たちの総体的な存在感が濃厚になっている。その結果ジュリアンは「真中にたちどまったまま、恐怖にすくんで、少しの身動きもでき」[TC212]なくなってしまう。取り囲むという行為は、内部に存在するものを外に出さないだけでなく、内部の者のすべての意志を奪いさり、その身体までも石化させ、取り囲む方の力で支配することを意味する。この第二の狩猟ののち、ジュリアンは両親を殺害するが、彼の運命はまさにこの瞬間に決定されたと言える。それは、鹿だけの呪いというよりも、森全体の、また過去に殺された動物たちの意志なのだ。じっさい、第二の狩猟には、黒い鹿はじっさい登場しないのである。この時から、ジュリアンは実体のない動物達の堅固な意志で動くことになる。

それでは、この集合した動物達の意志とは何だろうか。ここに出現する動物たちは、青銅や石のような堅固さを持っていると同時に、儂く、実体がないことに注目しよう。たとえば、ハイエナは草稿 f.156(465v)で余白に«*voilés par de poussière lointaine. nuage*»と書かれている。ジュリアンを荒れ果てた墓地の中で数匹で取り囲んだハイエナは、まるで「雲」のように、存在と非存在の境界に位置しているようである。彼らは、墓地という死者の支配的空間と生者ジュリアンの媒介者となっているのだ。また、ハイエナ達は「雲」という言葉からも連想できるように、空とも関連した存在でもある。同じf.156(465v)の本文で彼らは、«~~elles hérissaient le poil de leur ventre~~ ↑ *tu lumière passait entre les poils* ↓ *de la* ↓ *la lumière passait entre les poils de leur de leur dos*» と、月光を浴びているというよりも、まるで自身が発光体となって、毛の間から光を発散しているかのように描かれている。一般的にハイエナは死肉をあさる不吉な動物として闇の世界に属しているように考えられるが、第二の狩猟でのハイエナは、光と同化しある種の救いをジュリアンに与えよう

としているかの様相さえ示している。そのようなハイエナに導かれ朽ち果てた墓場に到着したジュリアンは、そこで、f.155(471r)に書かれている三つの十字架を見る。«un cimetière // abandonné, plusieurs † de vieilles croix à demi-pourries † à demi pourries, faisant des angles † [ill] leurs bras informes † sur † le ciel». この半分析ちた三角形を形づくっている三つの十字架が、手を天に向かって上げ救いを求めているように見える様子は、両親を殺害する運命にあるジュリアンの家族の苦しみの象徴であるのは確実であろう。その場所へジュリアンをいざなう月光を浴びたハイエナのイメージは、母親にジュリアンは聖人になると予言した月光の中に立った老人のイメージと見事に重なりあう。

結局、第二の狩猟での自然と動物達<sup>17)</sup>は、草稿 f.152(475r)の余白に書かれた«les étoiles de l'univers»という言葉に集約されるであろう。そしてこのメモは最終稿では次のように書かれるにいたる。

Il y avait dans son feuillage un choucas monstrueux, qui regardait Julien et, ça et là, parurent entre les branches quantité de larges étincelles comme si le firmament eût fait pleuvoir dans la forêt toutes ses étoiles.  
[TC212]

枝の間にそこそこに光る動物たちの目は「星が雨のように降ってきたかのように輝いた」と書かれているが、ここで注意したいのは«l'univers»と«monstrueux」という二つの言葉である。動物は異界のものである「怪物的要素」を持っているが、彼らの身体のもっと本質的内面を映す目は「天」に属しているのだ。この森そして動物達はたんなる死の空間や死者なのではなく、すべてを支配する天空に在るのである。奇妙なことに、最終稿で第二の狩猟の直後、城へ戻り、過って自分の両親を殺害した時、ジュリアンは次のような声を聞く。«Incertaine d'abord, cette voix plaintive longuement poussée, se rapprochait, s'enfla, devint cruelle, et il reconnut, terrifié, le brame du grand cerf noir» [TC214]. この鹿の鳴き声はプランの段階では第二の狩猟に出発する時に聞こえたことと記されていたが、最終稿ではジュリアンのすべての狩猟の終了の合図となっている。換言すれば、この声によって彼の罪を犯す期間は完全に終わりを告げたのだ。

結局、第二の狩猟は現実の狩猟ではなく、第一の狩猟の模倣であり、繰り返してであると言える。ただ、それは第一の狩猟のように狩りたてる者ジュリアンの立場からではなく、狩られるもの、犠牲者たちの立場からの狩猟なのである。それゆえに、死者であるはずの動物達が生者となり、生者であるはずのジュリアンが死者へと転換し、最終的には彼らはジュリアンを両親殺害へ導くのだ。しかし、天空に属している第二の狩猟の動物達は、ジュリアンを自分達が狩られたように、殺めたりはしない。彼を追い詰めながらも、決して傷つけない動物達の姿は、両親殺害の直後に聞こえた黒い鹿の声と同質であろう。彼らはジュリアンを苦悩と絶望へと追い込むが、また同時にジュリアンを赦し、救済する存在でもあるのである。

## 結論

一度目の狩猟は、鹿の親子の殺害で終わりを告げ、二度目の狩猟はジュリアンの両親の殺害で終了する。これらの二度の狩猟は、動物と人間との違いはあるにしても家族の殺害を引き起こすという共通点を持っている。しかし、同時に、第一の狩猟の時、鷹によってジュリアンの両親殺害と巡礼という行為、そして鹿によっては彼の精神面での苦悩と贖罪という物語の未来が暗示されてもいたのも事実である。そして二度目の狩猟を行うことで初めて、ジュリアンは犠牲者達の赦しを得、第一の狩猟での未来の予告を現実体験し、真の聖者への道を歩むことができるようになったのだ。さらに、『聖ジュリアン伝』が、ジュリアンが誕生した時の「帝王の身内」、「聖者」になるという予言とその実現の過程によって構成されていることを考慮に入れると、二度の狩猟は全体的な構成の内部における反復にもなっており、まさに物語の核を形成していると言えるだろう。つまり、これらの狩猟がなければ、物語は崩壊してしまうのだ。同時に、この作品は、二度の狩猟を内包することによって、人間を離れた動物という異質のものをとおして、次に描かれることになる『純な心』のオウムに象徴されるフローベール独特の聖なる世界の序章にもなっているのである。

## 註

- 1) Gustave FLAUBERT, *Trois Contes*. Texte, sommaire biographique, introduction générale, bibliographie, notes, ultimes corrections, transcriptions, établis par Peter Michael WETHERILL, Paris : Garnier, coll. "Classiques Garnier". 邦文引用は筑摩書房『フローベール全集』(1966年) 収載の山田九朗訳によるが、文脈によっては改変をほどこした。なお本文および注における引用の出典はページ数を[TC]の中に数字で示す。
- 2) E. H. LANGLOIS, *Essai historique et descriptif sur la Peinture sur Verre ancienne et moderne et sur les vitraux les plus remarquables*. Rouen, Édouard frère, 1832. フローベールは1879年2月16日にジョルジュ・シャルパンティエに「私はルーアン大聖堂のステンドグラスにある聖ジュリアンについて書きたいと思っている。ラングロワの本にある図版を色付けすることが重要だ、それ以上ではない。この図版をまさに私は気に入っている。なぜならこれは図版ではなく、歴史的資料だからだ」と語っている。Voir Gustave FLAUBERT, *Correspondance, nouvelle édition augmentée, huitième série (1877-1880)*, Paris: Luois Conard Libraire-Éditeur, 1930, p.207. ほかに G.BRUNET, *Légende dorée de Jacques de Voraigne*, traduit par Gustave BRUNET, Paris, Gosselin, 1843 などが知られている。
- 3) Gustave FLAUBERT, *Carnets de Travail*. Édition critique et génétique établie par Pierre-Marc De BIASI, Balland, 1988. Carnet 17はおそらく、1874年7月から1875年11月に書かれたと思われる。その中には結局書き上げられることのなかった『ナポレオン3世』についてのフォリオも含まれている。
- 4) *Ibid.*, p.734. F°75C.
- 5) 『聖ジュリアン伝』の草稿はGiovanni BONACCORSO, *Corpus Flaubertianum. III. La légende de Saint Julien l'Hospitalier*. Édition diplomatique et génétique des manuscrits, Paris: Didier, 1998に収められ

ている。本文および注における引用の出典はフォリオを[ ]内に示す。なお、草稿内の記号はつぎのことを意味する——

italique : variantes interlineaires

↑ variantes en interligne supérieur, 1<sup>ère</sup> campagne

↑ variantes en interligne supérieur, 2<sup>ème</sup> campagne

↑ variantes en interligne supérieur, 3<sup>ème</sup> campagne

↑ variantes en interligne supérieur, 4<sup>ème</sup> campagne

↓ variantes en interligne inférieur, 1<sup>ère</sup> campagne

↓ variantes en interligne inférieur, 2<sup>ème</sup> campagne

rature

[ ] crochets de Flaubert et de l'éditeur

| | barres de Flaubert

|| fin de ligne

- 6) *Carnets de Travail*, op.cit., p.730.
- 7) *Copus Flaubertianum. III*, op.cit., p.98. f.84(419v).
- 8) *Carnets de Travail*, op.cit., p.731. F°79, C, X.
- 9) Voir Pierre-Marc DE BIASI, «Un conte à l'orientale, la tentation de l'Orient dans *La Légende de Saint Julien l'Hospitalier*», *Romantisme*, N°34, 1981, pp.47-66. ビアジは『聖ジュリアン伝』のなかには「オリエント」という言葉は出てこないが、伝説的な特徴を強調するために、鷹や商人達、あるいは妻の国と関係してしばしば利用されていると言う。また聖アントワーンを誘惑し墮落させようとする悪魔は、彼をオリエントの国々へと誘ったことも忘れるわけにはいかないだろう。
- 10) ビアジは*Carnets de Travail*,のF°75V°の注の中で、鷹は次第にオウムのルルに色彩に似てきていると指摘している。
- 11) *Carnets de Travail*, op.cit., p.728.
- 12) 子鹿は「斑」があると最終稿に書かれているが、それは当然茶色に白い斑点であるはずである。そして«faucon haggard»も«corps blanc tacheté de brun»というように、逆ではあるが「白い身体に茶色の斑点」を持っているのだ。つまり、«faucon haggard»の色彩も完全に消滅したわけではないのだ。
- 13) Voir Marie-Julie HANOULLE, «Quelques manifestations du discours dans *Trois Contes*», *Poétique*, N°9, 1972. アヌルは『三つの物語』はどれも正確な年号ではなく、「夏の夜」や「夜明け」や「冬の朝」などという表現がよく用いられ、時を曖昧にし、超自然的な意味合いを醸し出す表現が特徴的であると指摘している。
- 14) Voir Gérard LEHMANN, *La légende de Saint Julien l'Hospitalier: essai sur l'imaginaire flaubertien*, Odense: Odense University Press, 1999.
- 15) Voir Pierre-Marc DE BIASI, «Le palimpseste hagiographique, l'appropriation ludique des sources édifiantes dans la rédaction de *La légende de Saint Julien l'Hospitalier*» in *Gustave Flaubert 2, mythes et religions (I)*, texts réunis par Bernard MASSON, Paris: Minard, 1986, pp.69-124. ビアジは、伝説の中ではジュリアンが川のそばの小屋で住む時、妻と一緒にあったが、フローベールは妻の存在を消去していると指摘している。両親殺害の運命の日、妻がすでに寝ている横でジュリアンが神に祈る姿は、すでにこのコトで妻とジュリアンがその日を最後に離別するであろうことを

暗示している。

- 16) f.120(480r)の余白には第二の狩猟のプランとして、「1° - ne trouve rien - 2°. les bêtes lui échappent 3° se moquent de lui» [f.120 (480r)]と、メモされていた。1°最初は動物を見つけられないが、2°見つかった動物も全部逃げてしまい、3°ジュリアンをあざ笑って終わるというこの3段階は、基本的に最終稿の描写と同じであると言える。
- 17) Voir Raymonde DEBRAY-GENETTE, « *La Légende de Saint Julien l'Hospitalier* : forme simple et forme savant » in *Essais sur Flaubert*, Paris: Nizet, 1979, pp.233-252. ジュネットは、第一の狩猟の中ではジュリアンの動物への恐れが表現されているが、それは本物の動物の限界を示しており、第二の狩猟の中では動物は反対に狩猟者を完全に精神的に上回っていると指摘している。またアヌルは第一の狩猟ではジュリアンが動物を追いかけたが、第二の狩猟では動物がジュリアンを追いかけており、対照的になっていると言う。(voir HANOUILLE, « *Quelques manifestations du discours dans Trois Contes* », op. cit.)